

- ◎11:30 遠敷峠（おにゅう）から歩き始めた。夏休みの湖西道路は海水浴客で渋滞が続き時間がかかってしまった。「百里のほうに歩いて途中で昼飯を喰いましょう」相澤・三宅の3人である。大阪は連日の35度越え、2階のアトリエも外気と変わらない暑さ。ここは涼しい、天気も曇っている、日本海側は青空が見えるが、琵琶湖側は黒い雲が並んでいる。今宵はテント泊をしようとしているが、天だ降りませんように。
- ◎30分ほど歩いたところで弁当を広げ、お二人は、「帰って荷を下ろして用意をしておくよ」というのにあまえて、オレひとり歩き始めた。
- ◎おにゅう：てっぺんでは漢字は<遠敷>だが麓では<小入谷>となっている。安曇川沿いの“梅の木”から針畑川沿いに北に向かう。川沿いの田園地帯、「ぽつりぽつりと家があるこれぞ田舎の風景きれいに輝く村と自然」なんて勝手なことを言っているが、オレお気に入りの道であり、村であり、風景である。川沿いの細い道をゆっくり楽しみながら走っている。梅の木が270M。生杉が450M。遠敷峠が830M。
- ◎多少風がある、涼しい、何日か前から続いている炎熱アトリエ、あの暑さがうそのように半袖シャツの背中を風が通る、「いいねえ 涼しいねえ 気持ちがいいねえ」そう思いながらこの快適さ・・・先日来、足痛のための試運転に、近所の三好山やら阿武山を歩いた。近所の山に比べ、この尾根道は違う、それはブナの樹だ。ブナの幹、黒色やらくすんだ緑色の中に、白色がある、その白色が葉の生い茂った樹々の中できらめく。地面に陽が射してこない、シカが喰ってしまったのか下草もない。登ったり下ったりの尾根道、その土の上にブナの幹がによきによき、直径が1メートルもありそうなでっかいやつがによきによき、いいねえ。
- ◎おおここからはスギの木が植えられている。熊剥ぎ防止の紐が幹に撒いてあるが、熊君、そんなことはお構いなしにあっちこっちの太い杉の皮を、ベロリ剥がしている、舐めると甘い樹液でも出るのかな、スギにとってはせっかくここまで大きくなったのに、熊にベロリでは情けない。熊君には会いたくないねと思いながらも小さい鈴しか持ってきていない、このチリリでは彼に聞こえないかもしれない。
- ◎百里が岳の直下、はあ～はあ～の登り、もうちょいだ、上の方は空が見える、標識まで見えるぞ、もうちょいだ。前回の2.3回、テント泊、酒が残った身体、きつきつと登っていたが今日はまだ余裕がある、気持ちがいい。手前のポコリンにはロープがあり根っこを掴んでよつんばいで登った。
- ◎根来峠まで戻って来た。ここは四つ辻、オレが歩いている徳島トレイルの尾根道と、昔からの大事な峠越えの道、サバ街道が交差している。尾根道は近代にできた、山仕事でできた道に比べ、サバ街道は生活道路、ひよっとしたら平安時代からあったのかもねえ。
- ◎山の中でキャンプをさせてもらった。太い樹が連なる尾根に広いところがある。お二人が先に場所を設営してくれていた。車から60リッターのザックに入ったテント・シラフなどを運んだ。今宵の躰を作った。「さあ飲もう」マイコップにワインを、ウイスキーを、焼酎を入れ、次から次に出てくるアテをいただいた。熊よけのラジオをつけ、ライトを灯した。
- ◎何度も言うが、ブナの幹がいい、あの白い斑点が山の中で不思議な迷彩雰囲気を出す。台風の影響なのか風がちょっと出ているが、空は明るい、雨が降りそうな気配はない。どんどん時間が経って、快く酔った、美味しい鍋をいただいた。
- ◎寝る前になると寒くなってきた。大阪に居るならば、炎熱アトリエ、見るのも嫌な厚手の長そでシャツを着込んだ、これで丁度いい、テントに潜り込んだ、シラフは広げて横に置いた、眠りこけてしまった。
- ◎朝6時に起き上ってまわりを散歩、寝たのは10時ぐらいかな。地面が斜めになっていたので何度か目覚めて身体を横に向けたり転がしたり・・・まったく雨は無かったようで地面は昨日と同じような状態、ケタイなキノコが生えている、楽しい色だねえ。
- ◎「飯を炊くぞ」三宅さんがサバ缶を入れてご飯を炊いた。それにオクラをきざんだ味噌汁、「いっぱい食べて・・・」椀に二杯もいただいた、美味しい。今日はこれで帰ろうということで、朝の9時に出発し、昼頃に帰り着いた。

三浦祐之著<出雲神話と出雲世界>

◎隣の芝生：先生、面白い表題をつける、これはいい。

◎オオクニヌシの治める地上は、長く平安に繁栄したらしい。その地上を高天の原から観察し続ける女神がいることを、地上の神々は知らなかったようだ。

◎「豊葦原の千秋の長五百秋（ながいほあき）の水穂の国」<この言葉は地上を最大級にたたえる言葉>は、わが御子マサカツアカツカチハヤヒアメアメノオシホミミの統（す）べ治める国である。

◎このあと神話は、天つ神による地上制圧の物語が展開する。従来、「国譲り」と呼ばれており、その国譲りという語から円満な譲渡という印象を与えられるが、内実は決して穏やかな譲り渡しではなく武力的な制圧、政治的な力による屈従とでもいえるものだという事は、読んでいけばわかる。「国譲り」という言葉は、明治維新と同様に無血で平穏な政権移譲のイメージのための言葉で、明治末期に出てきた言葉では・・・。

◎アマテラスの仰せにより、まず最初に、アメノオシホミミが天下ったが、「水穂の国は ひどく騒がしく荒れていることよ」と帰り昇った。

◎ここに、タカミムスヒとアマテラスは、天の安の河原の八百万の神々を集めて、オモヒカネに考えさせようとして仰せになるには、「この葦原の中つ国は わが御子が総べ治める国であることばをかけ委ねた国である。ところが、この国は ひどく騒がしく荒れ狂う国つ神どもにみちている さて いずれの神を遣わしいいむけようか」とすると、オモヒカネと八百万の神は話し合い、「アメノホヒ この神を遣わすのがよろしいでしょう」と申し上げた。そこでアメノホヒを遣わしたが、下に降りるやいなやオホクニヌシにへつらい靡いて、三年を経るも、返しごとひとつ申し上げなかった。

◎タカミムスヒがアマテラスの前に出ている、出雲神話では二人体制が続く。後々、タカミムスヒはタカギと呼ばれ活躍する。タカミムスヒは思慮を司るオモヒカネの父。

◎下に降りるやいなやオホクニヌシにへつらい靡いて・・・このアメノホヒの子孫が、出雲・武蔵・上つ海上・下つ海上・伊自牟・津島の国・遠江の国等の国造になった。今も出雲大社の宮司の祖先でもある。

◎アメノホヒが報告もしないので、タカミムスヒとアマテラスが再び神々に相談すると、「アメノワカヒコを遣わすのがよいでしょう」というので、二度目の使いとしてアメノワカヒコが派遣されることになる。

◎タカミムスヒとアマテラスが、威力ある弓矢、天のマカコ弓と天のハハ矢を持たせて、アメノワカヒコを遣わした。

◎ところがアメノワカヒコは、降りるとすぐにオオクニヌシの娘、シタデルヒメを妻にして、地上を自分のものにしようと企んで、八年を経るも何一つ返事もしない。

◎困り果てたタカミムスヒとアマテラスが、またもや神々を集め相談し、雉のナキメを派遣して事情を問わせることにする。

◎下に降りたナキメが、アメノワカヒコの門前の木に止まって伝言を告げると、それを聞いたアメノサグメが、アメノワカヒコをそそのかし、縁起が悪いから射殺せという。そこでアメノワカヒコが、天つ神から授けられた弓矢で雉のキナメを射殺すと、矢は高天が原まで射あげられ、タカミムスヒとアマテラスが座っている足元まで飛んでいった。

◎タカギ（このあたりから、タカミムスヒがタカギと呼ばれるようになる）が矢を検分し、アメノワカヒコが邪まな心があるなら、この矢で禍を受けようと言って、矢を射抜いた穴から下につき返すと、矢はアメノワカヒコの胸板に突き刺さり死んでしまう。

- ◎月輪時に登る道、ここは階段状の登山道、は～は～いいながら登っております。目的は愛宕山ですが、「地蔵の方に行けたら・・・」ということで歩いております。竜ヶ岳は愛宕山の北にあります。「行ったことがある・・・」おぼろ 10 年ぐらい前を思い出しながら、林道を奥まで歩き雪が多少残る辺りから登り始め、尾根道を愛宕まで行ったのでは・・・。探したが記録が残っていない、雪の中を歩く絵を描いた覚えがあるが、その絵がない。
- ◎まだ登り始めて一本目、暑い、汗が流れる、タオルも水もザックの中だ。天気予報では曇りのち晴れ、清滝の清涼地帯とはいえ連日の猛暑、薄手の半そでシャツに半ズボンのスタイルながらズボンでさえ濡れてきた。
- ◎もうすぐ頂上、でかい岩がごろりんの風景、なんでこんなところに花崗岩がゴロゴロかな、大昔に火山でできたところかな。直下のところでへたり込んで、少し早い昼飯にした。汗だらだら暑さ、4 回も休憩を取った。水は 2 リッター持ってきている。飯は朝作った。玄米ごはんは梅干しと胡麻粒。野菜を炒め卵でとじた。野菜たっぷりのサンドイッチは、ちょっとずつかじっている。
- ◎いつも弁当を喰う場所から、蛇行する川と市街地が見える、あれは・・・。帰って地図を見ると蛇行している川は桂川、嵐山の渡月橋は手前の樹々で見えないが、大きく右に曲がって大阪方面に流れていっている。向こうに見える市街地は宇治の方らしい、京都市街はもっと左の方だ。
- ◎いつも飯を喰った後、「あの地蔵の道は どこだったかな」とうろうろ散歩していた。首無し地蔵と書いてあった。首無しと聞いてかつての京の都で首を斬られた者を供養した地蔵かなと思っている。愛宕の北北西に地蔵山 947M と竜ヶ岳 921M がある。「竜に行こう」
- ◎三叉路の看板には、まっすぐ行けば地蔵とスキー場跡、右折は竜と首無し、となっている。「おお この道はいい」 雑木林とは失礼だけれど、細い木が無数にくねくね、上がったたり下がったりのおだやかな尾根道に、くねくねの無数の木、今の季節は空も見えないぐらい葉が茂っている。先日の徳島トレイルは、立派なブナの樹だった。むこうは立派だったけど、ここの細いくねくねも捨てたものではない、いいねえ。それと、ここを歩いているときには気づかなかったが涼しい、ここは涼しい、暑くない、着るもの濡れているがムシムシ感がない。このことは下山をしている時、五合目あたりに来た時に、「うへえ 暑い ムシムシ 汗が噴き出る」となって、上は涼しかったんだ、さすが 1000 メートル近い山だとあらためてわかった。
- ◎ハイウェイのようにすいすい尾根道を歩けるかと思ったら、だらだら上ったり下ったりもう 30 回ぐらいあったかな。しかし本当に気持ちのいい道だ。ふと下を見ると 3 センチぐらいの毛虫が曲がりくねって暴れている。「おお どないしたんかね」なんと、1 センチぐらいのアリがちょっかいを出している。小さいアリに緑色の筋のあるお洒落な毛虫がもがいている。ちょっと噛みついては離れる、そのタビに毛虫はパニックっている。ずっと見ていたが先を急ぐ道中のオレ、「たぶん 今頃は えっさほっさとアリに運ばれているのかな」
- ◎え、ここが、というようなピークが突然現れた。登山道の中に小石が積まれ、竜ヶ岳 921 メートルの看板、ピークはまったく魅力のない場所だった。うどんを喰っている方がおられた。真夏にうどんを煮て喰うのは熱いんじゃないのかな、と思いながらもすぐに引き返した。
- ◎愛宕と竜ヶ岳を結ぶ道、たぶん人の通りは少ないだろうと想像するわりには、踏み跡がはっきりしている、迷うようなところがない、人の気配のない時には獣たちや、いろんな生物がうろうろしている気配がする。
- ◎愛宕に引き返してきて後ろを振り返ると、地蔵山の大きなポコリン、竜ヶ岳の小ぶりなポコリンが見える。地蔵の途中には反射板があるらしいが、まるで見えない。ここは雪のころに来るといいかもねえ。
- ◎帰りは表参道を通って帰ることにした。2 リットルの水が少なくなってきたと思いながらも、境内の自動販売機で普通の倍の値段で売っている飲み物を買うのは許せなかった。
- ◎バテタバテタと長い道を下った。ほとんど麓に近いところに水場があるのを思い出した。あそこで水を補充して、顔を拭いて、とだらだら下った。バス停に着くと 5 分前にバスが出ていた。「ええい 55 分待つぞ 1 時間歩くのはいやだ」へろへろになって家に帰り着いた。バスと電車の冷房がありがたかった。

三浦祐之著<出雲神話と出雲世界>

- ◎前回からの続き：矢はアメノワカヒコの胸板に突き刺さり死んでしまう。妻のシタデルヒメは嘆き悲しみ、その哭声が、高天が原まで届き、アメノワカヒコの父や妻子がこぞってやって来て、喪屋を建て、八日八晩弔いをする。(アメノワカヒコの妻はアマテラスの娘：シタデルヒメだけではなかったのか・・・)
- ◎アメノワカヒコの二度目の遠征では、弓矢が与えられるという武力遠征のさまを窺わせる。アメノサグメという女スパイの登場。矢がブーメランのように帰ってくる、古事記では、還し矢の本とある。

- ◎アメノワカヒコの二度目の失敗で自信を喪失したように見える、オモヒカネが三度目の推薦人(神)は・・・。
- ◎天の安の河の河上の天の石屋にいます。名はイツノヲハバリ、この神を遣わすのがいいでしょう。もしこの神でなければ、この神の子、タケミカツチノヲ、この神を遣わすべきです。
- ◎すると案の定、イツノヲハバリは、息子の、タケミカツチノヲを派遣するように進言した。
- ◎タケミカツチノヲは、アメノトリフネという天空を飛ぶ鳥の船をお伴に、オオクニヌシのもとに向かう。
- ◎ここに、遣わされた二神は、出雲の国のイザサの小浜に降り到ると、タケノミカツチは、その身に佩いた十掬(とつか)の剣を抜き、逆さまに、その剣を揺れる波の穂の上に刺して、その剣の先に胡坐をかいて座り、そのオオクニヌシに問うていうには、アマテラスオオミカミとタカギの神の仰せにより、問いに遣わせなされた者である。なんじが己のものとして領(うしは)いている葦原の中つ国は、我が御子が総べ治めなさる国であるとお言葉を寄せ賜うた。そこで、なんじの心はいかがかと・・・。

- ◎イザサの小浜は今の稲佐の浜であろう。飛ぶ船に乗って降りてきたタケミカツチは、打ち寄せる白い波がしらの上に、剣を逆さまに立て、その剣先に胡坐をかいて問いかける、穏やかな口ぶりに見えるがそれはまさに脅しである。とても真似のできない状態でオオクニヌシに向き合うのである。
- ◎オオクニヌシは、自分では答えられない。息子のヤヘコトシロヌシが申し上げるだろうが、息子は、「鳥の遊びをし 魚取りをしに ミホの岬に出かけており まだ帰っていない」
- ◎鳥の遊びをし 魚取りをしに：これは、神に供える贄を準備することをいう。祭りの準備をしていること。鳥はおそらくオオハクチョウ。魚はおそらくスズキだとみていい。
- ◎コトシロヌシは父のオオクニヌシに向かって、「恐れ多いことです この国は 天つ国の御子に奉りましょう」というなり、自分は、その船を足で踏みつけてひっくり返し、青柴垣に逆手を打ちなして隠れた。兄のコトシロヌシは抵抗することもなく隠れてしまった、というより死んでしまった、殺された・・・。

- ◎次に弟のタケミナカタが登場。
- ◎タケミナカタは千引きの大岩を掌に乗せてやって来て、「どいつが オレの国に来て こそこそ嗅ぎまわっているのだ それならば おれと 力比べをしよう」という。
- ◎タケミカツチがおのれの手を、タケミナカタに握らせたが、握らせたとみるやいなや、自らの手を立ち氷(つらら)に変え、またすぐ剣の刃に変えてしまう。それで、タケミナカタが力を入れることができないでいると、タケミカツチが、タケミナカタの手をつかみ、まるで萌え出たばかりの柔らかな葦のごとくに握り潰し、身体ごと放り投げてしまう。タケミナカタは、恐れをなして逃げ出し、タケミカツチは科野の国の州羽の海に追いつめて殺そうとした。
- ◎許してくれ、どうかオレを殺さないでくれ。この地を除いて他所にはいかない、父の言葉に背かない。この葦原の中つ国は、天つ神の御子に差しだそう。
- ◎神話はあくまでも伝承であり、戦争をそのままリアルに描くというようなことは得意でない。戦争ではなく、力比べ、という比喩的な言葉が述べられているのでは・・・。

三浦祐之著<出雲神話と出雲世界>

◎タケミカツチはタケミナカタを諏訪まで追って命乞いをさせた。諏訪から戻ったタケミカツチはオオクニヌシに、「なんじの息子 コトシロヌシとタケミナカタの 二柱の神は 天つ神の御子の言葉のままに背かないと約束した そこでなんじの心はいかが」と尋ねる。

◎わが子ども、二柱の神の申し上げた通り、われもまた背くまい。この葦原の中つ国は、お言葉のままにことごとく献（たてまつ）ろう。ただわが住処は、天つ神の御子が、代々に日継ぎしご支配なさる、ひときわそびえる天の大殿のごとくに、土の底なる磐根に届くまで宮柱をしっかりと掘り据え、高天が原に届くほどに氷木を立ててお治め下さるなら、われは、百に満たない八十の隅の、その一つの隅に籠り鎮まっております。また 我が子ども、百八十（ももやそ）にあまる神たちは、ヤヘコトシロヌシが神々の先立ちとなってお仕えすれば、背く神などでますまい。

◎先生：宮殿を新たに造るのではなく、スサノオに祝福されて建てた宮殿がすでにある。オオクニヌシは、その宮殿を守り通したい、とおっしゃる。本居宣長の古事記伝では新築すると解釈され、近代の学者もそれに追随した。その根底にあるのは、出雲大社のような壮大な建造物を、出雲という辺境の者たちが単独で造れるはずがない、という中央の、ヤマトの絶対主義があった。

◎1980年角田遺跡から出土した大壺には高層建造物の絵が描かれていた。

◎オオクニヌシは、出雲の国のタギシの小浜に、タカミカツチを天の神の使いとして迎えるための館を造つての、（新たに迎賓館を建てた）ミナトの神の孫、クシヤタマを膳夫（かしわで）となし、まつろいのしるしの饗を差し上げて、祝いの言葉を申し上げることにしたのじゃ。（みあえを献たてまつる：敗者が勝者にごちそうする）そしてそのために、クシヤタマが海に潜る鵜となって海の底に潜り入り、底の赤土の赤土を啜りてきての、その土で八十の平皿を作り、海に生えるワカメの茎を刈り取ってきての、それを燧の臼（ひきりのうす）に作り、ホンダワラの茎を燧の杵に作り、新たな火をきりだして、タカミカツチに美味しい食べ物を作り供えたうえで、オオクニヌシはあらためて、誓いの言葉を唱え上げるのじゃった。

◎クシヤタマを膳夫（かしわで）となし：オオクニヌシの料理人の神に命じて、タケミカツチ一行の饗応の準備をさせ、服属儀礼をおこなう。

◎最後に語られるのが、服属儀礼の場においてなされた、敗者、オオクニヌシの唱えごと、寿詞（よごと）。

◎この、わが燧れる火は（読み方が？ きれる：でした）、高天が原においてはカムムスヒの祖神様（おやがみさま）が、ひときわ高くそびえて日に輝く新しい大殿に、竈の煤が長く長く垂れるほどに焚き上げるがごとく、いつまでも変わらず火を焚き続け、地の下はというと土の底の磐根までも焚き固めるほどに、いつまでも変わらず火を焚き続け、その火をもちて贄を作り、強い縄の、千尋もの長い縄を長く遠く延ばして流して、海女が釣り上げた、口の大きな、尾も鱭（ひれ）も麗しいスズキを、ざわざわと海の底から引き寄せ上げて、運び来る竹の竿もたわわたわに撓（しな）の大きなスズキを、美味しい召しあがり物として献（たてまつ）ります。

◎出雲における最も大事な、真魚（まな）である、鱸（スズキ）を釣り上げ調理する様であり、それがいつまでも変わらず続く、寿詞（よごと）である。

◎タケミカツチは高天の原に帰って、蘆原の中つ国を和らげ平らげたさまを、こと細かく申し上げた。

三浦祐之著<出雲神話と出雲世界>

- ◎出雲の国風土記は 733 年に、出雲国造であった、出雲臣広嶋から大和朝廷に「解」として提出された書物です。その 20 年前に大和朝廷から各国に風土記作成の命令が出ていた。現存する他の風土記は中央から派遣された国司によって編纂されたが、出雲風土記は、在地豪族である各郡の郡司によって編纂された。
- ◎先日来古事記に接して、内容が面白いのは当然ながら、「その時代 とは どんな時代」と疑問がわいた。教科書で一通りの歴史は習ったが、どうもうんざ臭い、歴史の先生に失礼だが、年表のことしか書いていない。
- ◎巨大古墳が近畿にたくさん造られた。古墳時代は 3~5 世紀。古事記に、オホサザキ（仁徳）の名前が出てくる。なかなか立派な人物のように書いてあるが、反面非常に好色で恐妻家であったとも書かれている。オレが幼少時代に、町内会で浜寺あたりの海水浴バスツアーがあった。戦後、5.6 年の時代、道路も満身に舗装がされてないころのおんぼろバスだったと思う。「あれが 仁徳天皇陵でございます」バスガイドのお姉さんが説明してくれたのを覚えている。向こうの方に緑の丘がこんもりあり、山やら丘やらが連なっていた。仁徳古墳だといつ最近まで認識していた。「仁徳天皇なんて人が いたかどうか わからない」といわれ始め、「ほんまかいな 今までの教科書は なんだったんじゃ」とぼやきだして 10 年ぐらいになる。
- ◎今は、仁徳古墳のことを大仙古墳と改められている。教科書への怒りは別の機会として、大仙古墳の築造時期は 5 世紀だとされている。今の時代、DNA があり、近代的な年代測定方法があり、科学的分析があり、記録文字が無くても、いつの時代に、どこでだれが、ということがますます精密にわかるようになってきた。それまでは出土した遺物を検索して、「この形態は この時代と 違うかな・・・」「この遺物は こう使われこう捨てられ・・・」学者先生が自身の知識で決めてきていた。今の時代になって、ますます精密測定法や機械の出現で、昔の学説が訂正されていく。
- ◎弥生時代・古墳時代の記録は、中国大陸から出てくる文字の中に、ちろっと、日本のことが出てくる。これが本当に日本のことか、日本だと書いてあるが、隣の島国のことだったり、うわさ話だったり、「信用できるのかね・・・」と疑ってしまう。
- ◎古事記や日本書記の内容を信じて、日本の天皇は 2000 年続いているとか、日本は神の国だからとか、変な方向に洗脳されてしまった。日本の国民全員が、変な方向に行ってしまったぶん、戦争が終わって自由になり、民主主義になり、言論の自由が叫ばれ、一億人の国民が、一億個の意見をもつ。あれやこれやかまびさしい限りで、一向に意見がまとまらない、方向が決まらない、これもよくないのでは・・・。
- ◎出雲風土記の中身の話、古事記との関連の話、こう勇んで書き始めたが、とりとめのないぼやきになってしまった。記紀や風土記が出てきたころには、まだ日本という名称は無いが、ヤマトを中心に命令系統や力関係がはっきりしてきたようですね。オホサザキ（仁徳）の時代、大阪・奈良あたりの豪族が現れ王になっていった。そのころに、日本海ベルト地帯の豪族もハバを利かせていた。その 500 年 1000 年前にも、日本列島全部に人がいて、何かを話して何かに笑って何かに泣いていた。このことが一番の興味だね。
- ◎古事記の中身は出版の 200 年前 300 年前の口承伝承が語られている。考えてみれば、文字で何ごととも整理整頓して解決しようとするが、文字が無くても、家を建て、服を着て、美味しいものを喰い、飾り物に贅沢品、文字以外の何でもがあり、何でもができたのだと、目からうろこ、そう解釈しなくっちゃ。

<民俗学：民衆史の遺産：芸能漂泊民・賤民>

◎クグツ：傀儡子（この読み方は、百日紅を、さるすべり、と読むようなものである）

◎クグツコ：クグの植物の茎で編んだ籠のこと。

◎朝鮮から渡来した白丁民は、柳行李に人形を入れ、それを担いで人形を舞わしながら山野を漂泊していた。彼らが日本に渡来してからは、柳の材料が得られないので、クグツコで行李を作った。クグツコカツギビトのことを、クグツと呼んだ。この白丁民は、朝鮮で賤民として差別されていた。

◎クグツの男は山野を彷徨する時は獵師で、ひと里では人形を舞わす：デコマワシなどの芸人であった。クグツの女は、しなを作り、化粧をする遊女であった。室町時代には巫女も売色をしたからクグツと呼ばれた。

◎芸能と売色とあるが、歌は後世に多々伝えられた。

◎デコマワシ、遊女等は宿場や港に集まった、これらの客は旅行者が多かった。奈良時代は難波。山城に遷都後は、江口、神崎に移った。平安時代には東海道などにも広がったが、鎌倉時代からクグツの名称が廃れだした。

◎サンカ、キジヤも山の漂泊民であった。

◎ここまで読んで、「えらい 差別発言」とあきれるが、当時の現実かもしれない。渡来の白丁民だけが遊女であるとか、あの時代の流行歌が、クグツだけの歌だったとは信じがたい。遊女も歌も、だれもがなしえた、作りえたのでは・・。

◎歌舞音曲に疎いオレ、それでも歌を聞き、演奏を感じ、舞台を見る楽しさは知っている。人を感じ、空気を見て、響きを見る。こういう感動感激は棄てがたい楽しみだ。もちろん美術も同じであると力説。縄文人のうたう歌も聞いてみたいね、大きな声でたのしげに、きれいな声で悲しげに、歌って欲しいねえ。

◎更級日記<平安時代の貴族：藤原孝標たかすえの娘>の著者が、足柄山中でクグツの歌唱を聞いた記事。

ふもとに宿りたるに、月もなく暗き夜のやみにまどふようなるに、あそび三人、いづくよりともなく出できたり。五十ばかりなるひとり、二十ばかり、十四五なるとあり。庵の前にかかさきさをささせてすへたり。をのこどもを、火を灯してみれば、昔、こはたといけむが孫といふ。髪いと長く、ひたひいとよくかかりて、色白く、きたなげなくて、さてもありぬべき下仕へなどにもありぬべしなど、人々あはれがるに、声すべて似るものなく、そらに澄みのぼりて、めでたくうたを歌ふ。人々いみじうあはれがりて、け近くて、人々もてけうずるに、「西国の遊びめはえかからじ」などいふを聞きて、「難波わたりにくらぶれば」とめでたく歌ひたり。見る目のいときたなげなきに、声さえ似るものなく歌ひて、さばかり恐ろしげなる山中にたちて行くを、人々飽かず思ひてみな泣くを、おさなき心地には、ましてこのやどりを立たむことさえ飽かずおぼゆ。

足柄山は 4.5 日前から恐ろしいほどの暗い道が続いた。麓で宿を取った。暗闇に迷いそうになっていると、遊女が 3 人、50 ぐらい、20 ぐらい、15 ぐらいが出てきた。仮小屋の前で唐傘をささせて座った。20 ぐらいの遊女は昔、“こはた”という遊女の孫だという。髪が長く、美しく顔に垂れ、色白であか抜けしているので、このままでも都で通用するだろうと人々は感心した。遊女たちを呼んで、みんなで興じていると、「西国の遊女は 上手く歌えまい」遊女が「難波あたりの遊女に比べたら とても及びません」と即興で歌った。見ためがあか抜けして、あれほどうまく歌いながら、暗闇の中に消えていくのを名残惜しんだ。

- ◎もう 8 月の下旬、あと 1 週間ちょっとで 9 月である。ほんとにもう、月日の経つのは早い、笑っちゃうほどのスピードで日にちが過ぎていく、その速さがますます加速度をつけてカーブしている。何年前までは、老いだの、老人だの思いもしなかったが、今のオレはジジイである、堂々と爺さんである、老人である。まわりの人たちも、歳をとった人だ、爺さんだ、老人だ、と接してくれる。「まだまだ 君と 変わらんやろ」と嘯いたところで、鏡を見ればしわシワである。
- ◎IC レコーダーを持って安威川河原に来ている。何日か前に台風が遠い太平洋を通過した。その影響で大雨が降った。「危険な雨量 命にかかわる雨量」という表現でニュースが流れていた、遠い何処かで水害に会った方々のニュースが流れていた。このあたりも、ザアザア降りの雨が 1 時間 2 時間続いた時間帯もあった。その翌日、自転車で高槻方面に行く時に、安威川の橋を渡りながら下の流れを見ると、黄土色に濁った水が河川敷をすっかり覆ってだくだく流れていた。それ以降も、夕方になると夕立が降ることが多くなった。今日は朝から空が曇っていたが、雨の降りそうな天気でもないかなと思って、洗濯物を外のベランダの下に干した。いつもはベランダの外に干す、外ならキラキラ太陽と暑さで半日もすれば乾く。今日は、あんのじょう雨はぼつりともなく、ベランダの下でも 3 時頃には乾いていた。雨の時は 2 階のアトリエに干す。2 階は夏も冬も暖かく乾燥しているので乾きが早い。そうなんですよ、洗濯物の係りはオレなんですよ。
- ◎オレが住まいする、茨木の南の方は雨が少ない。夕立でも 1 時間弱でやんでくれるが、北の方、山の方は雨が量もここらあたりに比べ多いし、しかもだらだら長時間降る。じゃじゃ降りが山の方で続くとすぐに、下流のこのあたりの安威川の水嵩が増える。今日の水はほとんど透明になりかかっているが、やや濁っている、やや水嵩が多い、流れもやや早い。いつもなら穏やかな流れ、透明な浅瀬に魚の姿があっちゃこっちゃんに見える、というような川である。2.3 日前は水も濁り、ざわざわぞわぞわ流れていた。先日の台風時の水嵩、黄土色に濁った水が河川敷をすっかり覆ってだくだく流れていた時の、最大増水の泥跡が、コンクリートブロックに残っている。オレの肩ぐらい、小さいお姉さんなら全身浸かる深さだ、それも河川敷からの話だよ、川底からだと大型トラックが浸かるかな。
- ◎盆が過ぎると、涼しくなるんよ、とおっしゃるように、台風やら、夕立やらで、あの灼熱アトリエも、37 度から、35 度に、33 度に、上がったたり下がったりしている。夜も涼しくなって、寝るときは扇風機もいらなくなったとはいえ、まだ、窓を開けている、朝方は冷えて、薄い布団をかけるが、身体が汗ばんでいる。若いころは窓を開けて寝ると、風邪ひき状態がすぐにやって来たが、ジジイになると、そのあたりはいたく健康なのか、身体が感じなくなってきているのか、いずれにしろ、風邪をひかないのはいいことだ。
- ◎今年の夏は山行が少なかった、というのは、足痛のせいである。何度も書いたが、河川敷で新しい靴をおろして、1 週間ほど経ったところに外反母趾のあたりが痛くなり、翌日には猛烈な痛みと腫れで、隣の韓整形へ駆け込んだ。すぐに治るだろう、たかが靴擦れだ、そう思っていたがもう 3 か月近く経って、いまだに完全ではない。以前のように安威川河川敷に来ているが、靴がない、今までの靴では小さい、困ったものである。棄てずに置いてあった後ろが付いているサンダルは、締め付けが無く快適に歩ける。登山靴は通常、ぶ厚い靴下をはくのだが、薄い靴下を使用すると、これまた締め付けが無く快適に歩ける。「痛風じゃないのかな」と皆さんに言われるが、何が原因でこうなったのか、これからどうなるのか、以前のようにシャカシャカ元気に歩きたいね。韓さんは、「歩きすぎだよ・・・」とおっしゃる。
- ◎カラスも夏になると、暑さ対策で、口を開けている。口腔内の赤いところが見える。犬ならば～は～いうんだけれど、カラスはただぼかんと口を開けているだけだ。「おいおい 元氣か」「かあ～ くわ～ やっほ～」カラスがいると声をかけるようにしている。連中もオレが近づくのを意識して、いざ、飛び立つぞ、とスタンバイ姿勢だが、なかには、「おっさん はよ 行って」と横着決め込んで動かない奴もいる。ハトに、声をかける気はないが、カラスはなんとなく会話ができそうで面白い。そのうち親しくなるカラス君が出てきて、いつも待っていてくれるとか、声をかけてくれるとか・・・とバカなことを考えている。

<民俗学：民衆史の遺産：芸能漂泊民・賤民>

◎大江匡房：まさふさ：1044～1111年 平安時代後期、儒学、歌人、兵法・・白河院政時代の公卿。

◎「遊女記」「傀儡子記：くいらいしのみき：くぐつき」の二編が載っている。ともに漢文でとても読み下せない、ネットで現代語訳を見つけたので抜粋。当時の一級の記録らしいが、風俗芸能記事かな。

◎「遊女記」

○山城の国、与渡津から船を大川に浮かべて一日西へ行くと、そこは河陽：山崎というところである。山陽、南海、西海の三道と京都との間を往来する人々は、だれでもこの通路によらないものはない。淀川の南北兩岸には村々が点在していて、味正一津屋（あじふひとつや：子ども時代から知っている地名である）付近で淀川から神崎川が分流するが、その辺を江口という。この付近には設営・宗次（？）だ典樂寮（薬、医療を司る役所）の味原の牧（乳牛用牧場）や掃部寮（宮廷行事の設営、掃除を司る役所）の大庭庄（マコモを育てる沼があった）があるぐらいで交通の要衝以外に取り立てるほどの土地柄ではない。

☆785年江口上流から神崎川が掘削され、交通の要路となった。とはいえ、もう500年1000年前は、大阪のほとんが海の中、オレの住まいする茨木市から10分も歩くと、島、浜、津などの字が付く地名が多くある。

○摂津の国に至ると、神崎や蟹島などの地があり、そこでは、娼屋の門が並び遊女の居宅が連なるように建っていて、人家が密集するほどの賑わいを見せている。遊女たちは群れをなして扁舟（小型も木造船）に掉さして旅船の間を漕ぎ回り、唱歌しながら客を求めている。舵取り女たちが客を呼ぶ声は溪雲：川霧をとどめるほどであり、遊女たちの謡う今様の調べと鼓の音は水風に余韻として漂っている。

○こうした賑わいに旅行者もついに家庭のことなど忘れ勝ちになってしまうのである。神崎川兩岸の洲には、蘆が生い茂り、川口の水面には白波が花のように波立って、まるで絵のような美しさである。川面には釣りを楽しむ翁の舟や、酒食を商う舟も多くみられ、それに遊女たちの舟もまじって、軸と艫が（じくととも）接するような混雑ぶりで、ほとんど水面が見えないほどの繁盛ぶりである。まさに天下第一の楽しき地といえよう。

☆梁塵秘抄：女の盛りなるは、十四五六歳 二十三四 とか 三十四五 にし成りぬれば 紅葉の下葉に異ならず（大年増の意味）

☆梁塵秘抄：遊びをセントや生れけん、戯れせんとや生れけん、遊ぶ子供の声聞けば、我が身さえこそゆるがるれ。訳：おとこのおもちゃとしてうまれてきたわ、さわられ、なでられ、抱かれるために、たまにやひとりで、生きたくもなるが、こみあげる、悲しみ、なんとしよう。

○これらの名妓はいずれも美声の持ち主であり、美女たちであった。こうした名妓たちと出会うと、男というものはとにかく美人がお好きなようで、上は身分の高い公卿から、下は一般庶民に至るまで、宴席を共にし、同衾すればたちまち夢中になって身も心も情を通じてしまうのである。

そうしたことから遊女の中には、身分のある人の妻や妾となって死ぬまで愛せられ、一生の幸せを得たものもいたという。たとい賢人や君子と言われるものでも、男というものはとにかくすきものが多く、このことだけは避けて通ることができないようである。

○遊女たちが参詣した場所は、住吉・広田がおおく、客が付き、幸大きいことを祈願した。

○家柄のいい家の侍女の中にも、自ら求めて、遊女社会に身を置き上下の舟に宿るものもいた。これを湍繕（早く繕う、転じて、売春のみを専門とするショートのことか）または出遊（アルバイト遊女）といった。

○女は媚術を用い、流し目を行い、腰を折って歩き、歯を見せて笑い、唇に朱、顔に白粉を施している。うたを歌い、淫らで、妖しい媚を売る。

○遊女は、今様を謡うのは表芸、房中に術を弄して男を満足させるのは裏芸。

◎昔のヨーロッパの風俗を、ということで目を付けたのが、ブリューゲルです。昔から知ってはいたが、「魅力的な絵だ 風俗画だな」ぐらいに思っていた。調べていくうちに、ブリューゲルの前に、ヒエロニムス・ボスがいた。

◎ヒエロニムス・ボス Hiernymus Bosch 1450~1516 オランダ 初期フランドル派 国籍オランダ。

「快樂の園」「聖アンソニーの誘惑」 風変わりなイメージや精密な光景、宗教、神話を描いた作品。

現ドイツ：アーヘン地方：現ベルギー国境に近い。にボスにある家で生まれ、人生の大半をここで暮らした。

◎もっとも有名な三部作 「快樂の園」 <ベニヤ板を4枚並べたぐらいの大きさ 板?に油絵>

左が<エデンの園：神と、アダムとイブが描かれ、エキゾチックな動物、フクロウや、イブを誘惑しようとする蛇や・・・おかしな形の小屋が描かれている。>中央は<快樂の園。不思議な生き物や、快樂に溺れる人々、喜びに満ちた裸体、幻想的な複合生物、特大果実、石の造形が描かれている。>右が<最後の審判：地獄の世界が描かれている。夜の冷たい色、拷問された人、凍った水路・・・大食いの罰 豚の尼僧・・・>

◎絵の中にはたくさんの人や動物、青い空に遊園地のような構造物。暗闇の中ジャックナイフに骨がいくつか。ほとんど裸の人物たちは、右往左往に喜怒哀楽を追っかけている。馬や豚、キリンや象もいる。人物と同じ大きさの小鳥やネズミもいる。絵は様々なシーンが丁寧に描かれている、「この部分はなに 何が描いてあるの どういう意味なの」何百もある部分のパーツひとつひとつを、虫眼鏡でつぶさに観察して理解したいという絵だ。500年前のヨーロッパ、人々は何を考え何を目指して生きていた。そんなこんなを捉えた画家が、「ちょっと皮肉ってやろう」と書いた渾身の作、見ていて飽きないね、楽しいね。このタイプの絵、オレには描けない、じっくり時間をかけて、初めの構想から、下図、描き始めると時の過ぎるのを忘れてしまう、こういうスタイルで仕事ができる人はまことに羨ましいと常々思っている。オレは、良きにつけ悪きにつけ、えいやあ、と袈裟懸けの一振りになってしまっている。

◎ブリューゲル Bruegel 16~17世紀 ブリューゲル家が画家一族として150年ぐらい続いたようだ。一族の祖が、「ピーテル・ブリューゲル」。16世紀ブラバント公国：現オランダ

◎ピーテル・ブリューゲル Pieter Bruegel 1530頃~1569年 16世紀のブラバント公国：現オランダ

ヒエロニムス・ボスの死後、彼の世界観を引きずりながら、「農民の画家」と呼ばれた。宗教画、バベルの塔なども手がけた。「農民の踊り」「子どもの遊戯」「雪中の狩人」

◎農民の婚礼：104 x 73 cm 油・板：配膳版の上はフランドルのプディングの皿、蒸し料理、今のプリンと違う。黒の礼服が花嫁。バグパイプ奏者：イギリスが有名だが、古代からの楽器。飲み物はビール。

◎500年前のヨーロッパの農村、結婚式の披露宴パーティの絵かな。小屋らしき建物の壁は土壁、日本と同じような色の黄土色土が柱と柱の間に塗られている。床も土、土を踏み固めて固まっている。東洋人や中東人と違って机と椅子の生活だ。厚さが5センチ10センチの板に足をつけて机や椅子を作っている。宮廷の絵に見えるような華奢な豪華造りは見られない、足は丸太をはめ込んだだけで、寒い室内で座布団もなく板の上に座っている。飲んでるのはビールらしい。皿に乗ったプディングがたくさん描かれているが、ほかに豚のまる焼きとか、七面鳥の姿焼とか見当たらないね。ハレの日の宴会料理としてはちょっと淋しいと思うが、ヨーロッパの農村はこんな風景なのかな。楽器はバクパイプしか見られない。バクパイプの演奏はイギリス兵の行進ぐらいしか思い出せないが、どんな曲が演奏されていたのかな。うたを歌い踊る人がいないのはまだ宴の初めなのか、「農民の踊り」では華やかに男女がステップを踏んでいる、踊る動きのある絵が描かれている、楽器はやはりバクパイプしか見られない。